

# 日中対訳に見る主語省略

## —童話のテキストを中心に—

### An Analysis of Subject Ellipsis in Japanese-Chinese Inter-translation Texts: Focusing on the Texts of Fairy Tales

付 改 華<sup>1</sup>

FU Gaihua

As major for children, the genre of a fairy tale determines that the author has to consider about both children's limited understanding ability and making the brief and concise outline of the story. This restricts selection way of omission, which is one operation of the textual coherence. The investigation found that, comparing with subject omission of text correlate type, on-the-spot type subject omission is more common used in the fairy tale discourse. It could be found that fairy tale discourse is a kind of text creation based on children's cognitive characteristics and the ability of reading and comprehension. This indicates that the anaphora of subject omission is smaller and it is more biased towards on-the-spot instructions. Meanwhile, it also reflects Japanese has the character for grasping the things and phenomena of the surrounding world from "First-person perspective", and the functions of non-omission are mainly to emphasize the coreference of the subject, to reflect the image of the person, or to convey the communication attitude and so on. In addition, omission and non-omission of the subject in the text can be thought to be the selection by changing the viewpoint and the intervention of other elements.

キーワード： 対訳テキスト、視点、伝達効果

Keywords: Translational text, Subject orientation, Perspective, Attitude of communication

#### 0. はじめに

児童を対象とする童話は、児童の理解力を考えるうえで、簡潔であるが活力あふれる言葉遣いがある特徴である。そのため、結束性を保つ手段の一つである省略手段の選択は、認知上及び語用上ある程度の制約が考えられる。本稿では、中日対訳の童話テキストにおける主語省略の実態を考察し、中日両言語における主語省略の使用差を明らかにし、主語

省略の発生条件および語用上の制限を解明することを試みる。

## 1. 先行研究

日本語における主語/主題<sup>2</sup>の省略については、議論が多くなされている。例えば、三上(1969 : 119-123)は、「前文の題目におんぶして、その一文としては題目の言表を欠くこと」を略題と呼び、「題目「X ハ」は非常に大切な成分であるが、相手にわかっていると思えば、一回一回繰り返さなくてもいいものであるし、場面の状況で了解が成立していれば、はじめから一回も言わなくてもすむことがある」と述べている。さらに、略題の範囲として、「前文や前々文の題目が響き続けているとき、提示の形ではなくても前文で注意の焦点にあった単語が、自然に題目の地位にせり上がったとき、暗黙の了解が成立したとき」(三上(1969 : 123))という三つの場合を挙げている。

久野(1978)は、「省略の基本原則」として、「省略されるべき要素は、言語的、或いは非言語的文脈から、復元可能 (recoverable) でなければならない」と指摘し、その上「省略は、より古い(より重要度の低い)インフォーメーションを表わす要素から、より新しい(より重要な)インフォーメーションを表わす要素へと順に行う」という「省略順序の制約」を提案している。

砂川(1990)は、主題の省略が許されるのは、省略されたものが何を指し示しているのかが読み手に理解可能である時と述べ、その主題の省略を可能にする条件として、「構文的条件」を提示し、その上「ハ」の主題提示と主題維持機能の角度から主題の非省略についても議論を行っている。野田(2004)は、文の中、句の中、複文・連文の中という三つのレベルにおいて、見えない主語を捉える手がかりを検討している。

それぞれの先行研究は、文の文法構造や情報構造、視点制約、理解過程などの視点から、主語/主題の省略条件を考察し、その成果、特に視点制約の見解は主語の省略研究にとってきわめて示唆的である。しかし、今までの研究は理論上の説明が多く、テキスト構成的及び語用的制限を解明することが求められている。さらに、童話というテキスト形式は児童の言語生成特徴を重視してなされるという点からみて、その主語省略を検討することは人間の省略感覚を理解するには有益であるように考えられる。

## 2. 研究対象と方法

本稿で検討する省略とは、文中で明示すべき成分が文脈でテキスト構成的或いは語用的要因で明示していないという現象であり、それを考察するには、参照テキストが必要であると考えられる。本稿では『日本经典童话诵读：日汉对照』の中の九つの童話テキストを対象に主語省略のデータを集め、前提要素、前提要素との文間距離、語用上の制限などを考察し、中日両言語における主語省略のテキスト構成的及び語用的特徴を解明することを試み

たい。

### 3. 調査結果

調査では、次のような3種類の省略例が見られた(便宜上、本稿では、省略成分をΦで表記し、その指示対象が話し手か、聞き手か、文中成分か、話題かによって、右下にS、H、i<sup>3</sup>、Tをつける。また、複文について、主語省略のある節をそれぞれ〔 〕で表記し、複数の文があるテキストについては、一文ずつ①、②、③…のように番号をつける)。

- (1) [Φ<sub>H</sub>安心しろ]、[Φ<sub>S</sub>ちゃんと土に埋めておいてやった]。  
 ([你放心吧]、[我已经把它埋到土里了])
- (2) 優しいおじいさんとおばあさん<sub>i</sub>は[Φ<sub>i</sub>欲張りおじいさんを疑わず]、しろを貸してあげました。  
 (善良的老爷爷和老奶奶对贪心爷爷没有生疑，Φ<sub>i</sub>把小白借给了他)
- (3) ①昔、山に一人で暮らす若者<sub>i</sub>がいました。②Φ<sub>i</sub>働き者でしたが、暮らしは貧しいものでした。③寒さも厳しくなり始めたある日のことです。④Φ<sub>i</sub>集めた薪を背負い、家路を歩いていると、どこからか物音が聞こえてきました。⑤不思議に思った若者<sub>i</sub>がそちらのほうへ行ってみると、わなにかかってもがいている美しい鶴がいました。⑥若者<sub>i</sub>は鶴をかわいそうに思い、わなを外してあげました。  
 (①很久以前, 有个独自在山里生活的年轻人<sub>i</sub>。②年轻人<sub>i</sub>很勤快, 可是生活却很贫穷。③天气越来越冷了, 有一天, ④年轻人<sub>i</sub>背着捡来的柴, 走在回家的路上, 不知从哪里传来了响声。⑤年轻人<sub>i</sub>觉得很奇怪就朝着那个方向走过去一看, 是一只掉进陷阱中挣扎的美丽的仙鹤。⑥年轻人<sub>i</sub>看到仙鹤很可怜, 于是帮它解开了绳子)

上述した例において、(1)では、前項では会話の参与者である聞き手が、後項では話し手が省略主語の前提要素となっている。本稿では発話現場における参与者が主語の前提要素となる場合を現場指示型省略(非省略の場合は現場指示型非省略)とする。(2)は複文の例で、従属節「Φ<sub>i</sub>欲張りおじいさんを疑わず」で省略主語が発生し、その前提要素は複文の主題である「優しいおじいさんとおばあさん」となる。このような複文内の主語省略は本稿では複文内主語省略とする。一方、(3)では、文②、③、④、⑤ではいずれも省略主語が発生しているが、②、④、⑤ではその前提要素は①の存在主体である「若者」であり、③では文脈によってその主語は「これは」か「話は」になると推測できる(表現習慣のため、中国語訳とは完全に合致していない)。このような文を超え、前提要素を指し示す省略類型をテキスト内主語省略とする。

以上の3種類の主語省略について調査した結果は、次の表1に示すことができる。

省略類型	省略有無		省略	非省略 <sup>4</sup>
	言語別			
現場指示	日本語		92	31
	中国語		34	89
複文内	日本語		55	1
	中国語		54	2
テキスト内	日本語		26	13
	中国語		7	32

表 1 対訳テキストにおける主語省略の分布

表 1 から次のことがわかる。発生頻度からみて、日本語においては現場指示型省略が一番多数見られた(92 例)が、中国語においては現場指示型非省略が一番多数である。複文における主語省略は中日両言語は大体同じ頻度で観察した(それぞれ 55 例と 54 例)。テキストにおいては、両言語とも少数であるが、日本語のほうはより多数(26 例)で中国語は極少(7 例)である。また、非省略の場合、現場指示型主語非省略は前述したように一番多数であるが、複文においては両言語とも少数で、日本語は 1 例、中国語は 2 例見られた。一方テキストにおいては日本語は 13 例、中国語は 32 例見られ、中国語のほうでは省略しにくいことがわかる。

これらの数値から次のようなことが推測できる。即ち、童話のテキストは児童の認知特徴と理解力に基づいて作り出されるもので、文を超えての省略、つまりテキスト内の省略は避けられているが、現場指示と複文における主語省略の場合、前提要素を探す手間がかからないのでより頻繁に用いられていることが考えられる。また、日本語における現場指示型主語省略の多用は、児童の段階ではあっても「自己の視点」で物事を把握する日本語の性格が具現されている。では、次節からこの三種類の主語省略と非省略の分布特徴、テキストの特徴及び語用的制限などを検討する。

### 3.1 現場指示型主語省略と非省略

一人称主語、二人称主語、三人称主語それぞれの省略状況について観察を行った。結果は表2になる。

主語人称	省略有無		
	言語別	省略	非省略
一人称	日本語	50	23
	中国語	10	63
二人称	日本語	36	7
	中国語	19	24
三人称	日本語	4	0
	中国語	4	0

表2 現場指示型主語省略・非省略の分布

調査では、日本語のテキストにおいて一人称と二人称の主語省略例が多数(各 50 例、36 例)で、三人称主語省略が少数(4 例)であることがわかる。一方、中国語のテキストにおいては、それぞれの省略数は 10 例、20 例、4 例であり、二人称省略主語がより多数であることがわかる。

また、中日語の対照状況も調査してみた。結果は表3になる。

省略の対照 主語人称	同時省略	片方省略		同時非省略
		日本語省略	中国語省略	
一人称	10	40	0	23
二人称	19	17	0	7
三人称	4	0	0	0

表 3 現場指示型主語省略の対照状況

結果として次のようなことがわかる。同一テキストにおいて、両言語では同時省略と同時非省略の例があるが、片方の省略となると、必ず日本語の省略となる傾向が見られる。それぞれを見ていこう。

### 3.1.1 一人称主語の省略と非省略

本稿で考察した一人称主語省略は表出(意志, 願望)表現で最も頻繁に見られた。例えば、次の例(4)では「～たい」の形で、(5)では「～ましょう」の形で話し手の意志を表し、その主体を明示していない。

- (4) **Φs** この歌をもっと聞きたいの  
(**Φs** 还想再听听这歌声)
- (5) **Φs** それでは、穴の外までお送りしましょう  
(那么, **我**送您到洞外吧。)

一方、述べ立て表現にも省略例が見られた。例えば、次の例(6)では「**Φs** ちゃんと土に埋めておいてやった」、(7)では「**Φs** 間違っ、ちがうやまにのぼってしまったんですさい」で一人称主語が省略されている。

- (6) 安心しろ、[**Φs** ちゃんと土に埋めておいてやった]。  
(你放心吧, **我**已经把它埋到土里了)
- (7) おお、いや、**Φs** 間違っ、ちがうやまにのぼってしまったんですさい。  
(噢, 哎呀, **我**跑错了, 到了另外一座山上。)

しかし、中国語訳で一人称主語が省略されていない。これはデータ上日本語における一人称主語省略の普遍性が検証できたと考えられる。理論的解釈としては、久野(1978)、寺村(1982)、仁田(1999)、益岡(1997)、森田(2002)などがあげられる。寺村(1982)、仁田(1999)、益岡(1997)などは文の表現類型と主語省略の関わりを議論したが、久野(1978)と森田(2002)は視点の観点からその理由を議論している。久野(1978)は、日本語では発話者が「潜在的な主題」で、一番省略しやすい要素であると指摘している。森田(2002)は、日本語は基本的には「自己の視点」から物事を把握し、自己を強調する、或いは自己を他者と対比する場合に限って、自己を客体化すると述べている。本稿の調査は、童話のテキストでも日本語のこのような性質が捉えられ、読み手が児童であるから省略すべきものを省略しないものが見られなかった。即ち、省略しないのは明示する必要があるように考えられる。例えば、次のような例を考えよう。

- (8) おら、貧しい、いいくらしはさせられねえ。  
(可我, 我很穷, 没办法让你过好日子。)
- (9) わたしは体が小さいですが、他の人に負けないように働きます。  
(我的身体虽然小, 可是我会像其他人一样努力工作)
- (10) 早起きなら、にわたりのわたしが1番よ。(说起早起, 我鸡可是第一哟。)

例(8)、(9)、(10)では、一人称主語はそれぞれ「おら」、「わたしは」、「にわたりのわたしが」の形で明示され、語用上の伝達効果がもたらされると考えられる。例(8)では、後項の「いいくらしはさせられねえ」の理由として、「おら、貧しい」が完全な焦点情報であり、一方が欠けると、理由として成り立たない。それに加えて、「おら」は素朴な人物像を描き、人物関係を呈する効果ももたらされる。(9)では、「わたしは」は丁寧な口調で、主人公の決心が読み取られる。(10)では「にわたりの」で「わたし」が特定され、さらに主格助詞「が」で排他的主語となっている。以上の三例では、非省略主語は情報構成、人間関係、人物像の浮き彫りなどの修辞上、そして語用上重要な働きを果たし、省略しにくいと考えられる。

一方、中国語訳のテキストには、省略されたり、省略されなかったりする場面が見られた。観察してみると、中国語の省略主語の場合は、独り言、自己包括型勧誘、強い意志主張があげられる。例えば、上例(4)は独り言で、主語が省略されている。次の例(11)は自己包括型勧誘で、例(12)は強い意志主張を表すものである。

- (11) Φs 困っている人に分けてあげよう(Φs 把这些分给那些困苦的人吧)
- (12) Φs 来ません、Φs 来ません。Φs もう二度とさらいにきませんよ。  
(Φs 不来了, Φs 不来了, Φs 再也不来抢夺公主了)

他に、日本語は典型的な表出型表現であるが、表現の習慣により、一人称主語が文にこない中国語訳も見られる。例えば、例(13)は「我认为这可是有点儿难啊」と中国語に訳すと不自然である。日本語では、「～と思う」で自己主張を婉曲的に表出することになるが、そのまま「我想/我认为/我觉得」に直接訳すと、強い自己主張となるからである。一方例(14)では、「～ていただけませんか」では一人称が主語となる請求表現であるが、中国語訳は二人称主語になるのである。

(13)  $\Phi_S$  ちょっと難しいと思うが(这可是有点儿难啊)

(14)  $\Phi_S$  今夜だけでも泊めていただけませんか(今晚能让我留宿吗?)

### 3.1.2 二人称主語の省略と非省略

二人称主語省略の多くは働きかけの文型で見られた(25 例)。会話の流れで省略されるのが 8 例で、疑問文で省略されるのが 3 例であった。次の例(15)は働きかけの例で、(16)は会話の流れで、(17)は疑問文で発生した省略例である。

(15)  $\Phi_H$  目をつむって、三つ数えてください。

(请  $\Phi_H$  闭上眼睛, 数到三。)

(16)  $\Phi_H$  小さいのに、なかなか知恵が働くとか。

(听说你年纪很小, 可却很有智慧啊)

(17)  $\Phi_H$  まだやってるの? そんなことじゃ間に合わないのよ。

(你们还在吵呀? 这样的话就来不及了。)

働きかけは普通命令、禁止、請求、勧誘、許可などの言語行為で用いられる。以上の例(12)は文末の「てください」で命令行為を行うが、他に命令を表すものには「～なさい」、「てくれ」、動詞の命令形などがあげられる。また、禁止を表すものには「てはいけない」、「てはならない」、「だめだ」、「べからず」、「動詞+な」など、勧誘には「ほうがいい」、「たらどうですか」、「ことだ」、「ものだ」、「ないか」、「う(よう)ではないか」、「たらどうですか」など、許可には「てもいい」、「かまわない」などがあげられる。

働きかけの文は聞き手を動作主体とする文であるので、言語の生成からみても、認知理解からみてもその省略が最も自然である。したがって、このような省略は日本語だけでなく、中国語や英語にもよく現れている。ところが、日本語に比べて、中国語の二人称主語省略は命令や禁止行為でよく見られるが、請求、勧誘、許可などの行為では省略しにくい



のである。例えば、次の例を見てみよう。

- (18) すまんね、許してくれ、〔**Φ<sub>H</sub>**もう機織りはしなくていいから〕、そんな、〔**Φ<sub>H</sub>**どこにもいかないでくれ〕  
 (对不起呀，请原谅我，〔**你**不要再织布了〕，那个，〔请**您**无论如何一定要留下来〕)
- (19) **Φ<sub>H</sub>**少し横になってたほうがいいぞ(**你还是睡会儿吧**)

例(18)では二つの許可と請求を表す句がある。日本語では二か所とも二人称主語が省略されているが、中国語訳では省略されていない。勧誘を表す(19)でも同じ現象が見られる。

会話の流れで、話し手と聞き手両方とも発話の主語がわかる場合では、日本語は常にその主語を省略している。例えば、上述した例(16)は「將軍」が「一休」に対しての発話であるため、「だれ」が「小さいのに、なかなか知恵が働く」かはわかりあうものであり、主語が省略されている。しかし、中国語の場合、このような省略が許容しにくい。

疑問文でも同じような現象が見られる。上述した例(17)はその例である。疑問は相手の動作や状態に対する問の場合、その動作や状態の主体が明らかであり、省略されるのが自然である。しかし、中国語では、省略されることがある程度許容されるが、無標な形にはなっていない。

次は日本語における二人称主語非省略を考えよう。

- (20) うん、おら、火が消えないように見てるから、〔**おとう**は先に休んでくれ〕。  
 (嗯，爸爸，我看着火不让它熄灭。〔**你**先睡吧。〕)
- (21) なあ、おゆき、〔**おまえ**が嫁に来てくれて〕、おら、本当にうれしいよ。  
 (呐啊，阿雪，〔**你**嫁给我〕，我，真的很高兴。)
- (22) 一寸法師とやら小さいが、志はしっかりしているようじゃなあ。  
 (一寸法师呀，**你**长得虽小，可却有着壮志。)

例(20)では「見てる」と「休んでくれ」の動作主体はそれぞれ「おら」と「おとう」であり、特に後項は「は」の形で現れ、対比の効果が一向高まっている。例(21)では「おまえが」の形で排他的主語となっている。例(22)では「一寸法師とやら」の形で、上位者としての「大臣」の体の小さい「一寸法師」への薄い感興が読み取られる。つまり、一人称省略と同じように、二人称主語の明示にも発話態度が暗示され、ある程度の語用的機能が果たされる。童話と関連して、いきいきとした人物像の描きあげ、ストーリーの面白さと内容の広がりなどで児童の想像力を十分に発揮させる語り方となっていることが考えられる。

### 3.1.3 三人称主語の省略と非省略

本稿の調査で、現場指示機能の三人称主語省略が4例しか見られなかった。それにこの4例は中国語にも日本語にも観察された。この4例を見てみよう。

- (23) おや、 $\Phi_T$ こんなに濡れて。(噢呀！ $\Phi_T$ 淋得这么湿)
- (24) かわいそうに、 $\Phi_T$ 迷子になったのかもしれないね。  
(真可怜， $\Phi_T$ 可能是迷路了吧)
- (25) ああ、 $\Phi_T$ なんとうまそうじゃ、ありがとう。  
(啊啊， $\Phi_T$ 看起来很好吃啊，谢谢。)
- (26) うん、 $\Phi_T$ だれかい。(  $\Phi_T$ 是谁啊)

例(23)、(24)はおじいさんとおばあさんが目の前にいる濡れている子犬を見て発した言葉で、「こんなに濡れて(淋得这么湿)」、「迷子になった(迷路了)」の主体はこの目の前の子犬で、文中で省略されている。(25)では「うまそう」の主体は目の前のおにぎりで、(26)では「だれ」の主体は雪の夜訪ねてきたお客さんで、文中で明示されていない。

以上の例でわかるように、現場指示型三人称主語の省略は会話で少数であるが、両言語において省略されることからある程度の相似性が見られる。

### 3.2 複文内主語省略と非省略

本稿での考察では、複文における結束機能の主語省略例は日本語で55例、中国語で54例見られた。非省略の例はそれぞれ1例と2例であった。また、省略または非省略主語をそれらと同一指示になる要素が主節主題(Theme)か、主節補語(complement)かによって考察してみた。両言語の省略類型はいずれも主節主題一致型であることに興味深い。結果は次の表4で示すことができる。

省略 言語 指示対象 別		省略有無	省略	非省略
			主節主題一致型	主節主題一致型
複文内	日本語		55	1
	中国語		54	2

表4 複文内主語省略の対照状況

次節では複文内主語省略と非省略を検討する。

### 3.2.1 省略主語について

次の例を見てみよう。

- (27) 子供がいないおじいさんとおばあさんは<sub>i</sub>〔Φ<sub>i</sub>子犬に「しろ」という名前をつけて〕、たいそうかわいかりました。  
 (没有孩子的老爷爷和老奶奶<sub>i</sub>〔Φ<sub>i</sub>给小狗起了个名字叫小白〕，并且非常宠爱小白)
- (28) しろは<sub>i</sub>〔Φ<sub>i</sub>おじいさんとおばあさんに大切にされ〕、元気に育っていきました。  
 (小白<sub>i</sub>〔Φ<sub>i</sub>得到老爷爷和老奶奶的悉心照料〕，健康地成长)

例(27)では従属節「子犬に「しろ」という名前をつけて」の主語は主節主題主語「子供がいないおじいさんとおばあさん」と同一指示となっている。例(28)では従属節「おじいさんとおばあさんに大切にされ」の主語は主節主題主語「しろ」と同一指示となっている。同じような省略は中日両言語にも観察されている。本稿では、付改华 (2012<sup>a, b</sup>, 2018)に従い、このような省略類型を主節主題一致型主語省略(非省略の場合は主節主題一致型主語省略)とする。

童話テキストにおける主節主題一致型主語省略の普遍性は、久野(1978)、付改华 (2012<sup>a, b</sup>, 2018)の視点制約によって検証できる。即ち、話し手はいつも視点を会話のある参与者におき、その参与者は叙述を展開させる話題中心である可能性が最も高まっているが、ここでいう話題は先行文脈の話題中心である可能性もあるし、文の主題である可能性もある。理論上、あるテキストの視点関係は次のように考えられる。

$$1 = E^s(\text{話し手}) \geq E(\text{先行話題}) \geq E(\text{文主題}) \geq E(\text{文中主語}) > E(\text{文中補語})$$

主節主題一致型省略(「Xは(Xが)…。…」)は、主題「Xは」の関与で、話し手の視点が常に「X」におかれ、視点関係は「 $1 = E(\text{話し手}) \geq E(X)$ 」となる。視点の一貫性によると、従属節でも、視点が「X」におかれることが求められる。一方、主語も視点のおかれやすい成分であるため、「Xは(Xが)…。…」の場合、「Xが」省略されるのが視点の一貫性に一致することになる。これは児童の認知特徴にも合致し、童話テキストで頻繁にみられるのも自然である。それに対して、主節補語を前提要素とする主語の省略はそれを生成、解釈する労力は児童に対しては大きな負担となるので、童話のテキストで避けられている

ように考えられる。

さらに、童話テキストにおける複文内主語省略は、日本語でだいぶ「～て」或いは中止形の従属節で発生することも観察された(それぞれ 20 例、16 例)。他には様態を表す従属節は 9 例であった。これは「～て」の多用が児童の言語特徴であると考えられる。大倉(1970)も、日本の児童の「～て」の多用を指摘している。

### 3.2.2 非省略主語について

主節主語は従属節主語と同一指示でない場合、児童の理解力の制限で、両方の主語を明示することが普通である。例えば、次の例(29)では、節①と節②は並列関係となり、それぞれの主語が同一指示でなく、中日両言語においても明示されている。

- (29) 〔①ねずみたちは大騒ぎ、あちらにがしゃん、こちらにどすん〕、〔②穴の中はあちこち崩れて、真っ暗になってしまいました〕。  
(〔老鼠们大乱，那边儿咣当，这边咕隆〕，〔洞里四处都塌陷了，变得一片黑暗〕。)

しかし、本稿で考察する複文内の主語省略と非省略は結束機能を果たす主語のことであり、上述した(29)のような非省略例は考察対象ではないことにする。

次は、結束的な主語非省略の例を考えよう。まずは日本語の例である。

- (30) 欲張りじいさんは<sub>i</sub>〔自分<sub>も</sub><sub>i</sub>小判を手に入れようと〕小さなお結びをもってねずみの穴へやってきました。  
(〔贪心爷爷<sub>i</sub>也想要得到金币〕，他<sub>i</sub>拿着饭团来到老鼠洞前。)

例(30)では、〔 〕で括られた従属節の主語は再帰代名詞「自分」と「も」の形で明示されている。一見「自分」は主節主題主語「欲張りじいさん」と同一指示となるかのように見えるが、「も」は同一行為或いは行為主体の存在を前提にして使われる係助詞で、「も」で「自分」を提示することによって「小判をもらった」という同一行為の実現を求める欲張りじいさんと同一指示になり、「小さなおにぎりをねずみのところに持ってきた欲張りじいさん」を指し示す主節主題主語とは同一指示ではないと考えられる。これは中国語訳でも同様である。しかし、中国語訳では再帰代名詞ではなく、三人称代名詞の「他」の形になるが、これは日本語における係助詞「は」の及ぼす範囲が広いという観点から解釈できると考えられる。「大辞林」では、係助詞「は」の機能について、「語や文節、活用語の連用形などに接続し、多くの事柄の中から、一つのものを取り出して提示したり、題目を提示して、叙述の範囲をきめたり、叙述内容の成り立つ条件に限定を加える事を示す。また、

格助詞や副詞などに付いて意味や語勢を強めるなど、二つ以上の判断を対照的に示すこともある」という指摘があり、文末ないし文を超えて影響を及ぼすことがその特徴である。中国語訳における主語非省略は次の(31)でも見られる。

(31) 雪女<sub>i</sub>は①〔Φ<sub>i</sub>やさしいみのきちのことが忘れられないのか〕、それとも、②〔Φ<sub>i</sub>残した子供たちのことを思ったか〕、③〔ヒュウヒュウと悲しいことを立てながら〕、雪の山々を駆け巡っているということです。

(雪女<sub>i</sub>是①〔无法忘记善良的箕吉呢〕，还是②〔思念她留下的孩子们呢？〕她<sub>i</sub>③〔发出嗖嗖的悲鸣〕，在雪山徘徊。)

例(31)では、日本語の場合、主節主題主語「雪女は」は従属節①、②、③までかかり、3か所とも主語省略が発生したが、中国語訳では節③に相当する「她<sub>i</sub>」〔发出嗖嗖的悲鸣〕、在雪山徘徊」では主語が「她」の形で明示されている。これは、翻訳時の文処理の問題であるが、中国語訳では、「她<sub>i</sub>」〔发出嗖嗖的悲鸣〕，在雪山徘徊」は正確に言えば、複文の従属節でもなく、主節でもなく、前の複文「雪女<sub>i</sub>是①〔无法忘记善良的箕吉呢〕，还是②〔思念她留下的孩子们呢？〕」とは連文関係となるのである。これは、日本語に比べて、中国語における主題の及ぼす範囲が制限されているからであるように考えられる。

### 3.3 テキスト内主語省略と非省略

表1で示すように、童話テキストには、テキスト内の主語省略は多数ではない(日本語で26例、中国語で7例)が、日本語のほうがより多く見られた。また、日本語では、非省略と比べて、省略のほうがより多数であるが、中国語訳はその逆であることがわかる。

テキスト内主語省略と非省略について、本稿は主に前提要素との文間距離を考察した。前提要素との距離を考察する際、ハリデー&ハッサン(1997)の規定に従う。ハリデー&ハッサン(1997)は、テキストのつながりには、文が直前の文に関連付けられる「直接のつながり」と、いくつかの結束形式を仲介して前提要素と関連付けられる「仲介のつながり」、前提要素との間に別の要素が介在する「遠隔のつながり」、という三種類のつながりのタイプがあり、直接のつながりの場合の距離は0、仲介のつながりの場合の距離はM(n)、遠隔のつながりの場合の距離はN(n)と記している(ハリデー&ハッサン(1997: 439)を参照)。調査の結果は次の表5に示すことができる。

距離 \ 省略の対照	同時省略	片方省略		同時非省略
		日本語省略	中国語省略	
0	6	6	1	1
M(n)	0	1	0	0
N(n)	0	13	0	11

表 5 テキスト内主語省略の対照状況

表 5 からわかるが、文間距離が 0 の場合に限って、中日両言語で同時に主語省略が発生するが、常に省略されるというわけでもない。また、M(n) の場合、日本語では主語省略が発生するが、1 例しか観察できなかった。一方、N(n) の場合、日本語では主語省略が 13 例あるが、中国語訳は一例も観察できなかった。それに対して、両言語とも非省略の例が顕著に観察された。

### 3.3.1 「直接のつながり」の場合

本稿で観察した中国語のテキスト内主語省略はほとんど直接のつながりの文間で生じている。そして、ほとんどの場合、日本語のテキストには同じような省略が見られる。次の例を見てみよう。

- (32) ①おじいさん<sub>i</sub>はうれしくなって、木に登りました。そして、②Φ<sub>i</sub>また灰を撒くと、しろのような可愛らしい花が次々と咲いていきます。  
 (①老爷爷<sub>i</sub>高兴起来，爬上了树。并且，②Φ<sub>i</sub>又撒了一些灰，像小白一样可爱的花朵接连不断的开放了)
- (33) ①みのきち<sub>i</sub>は残された子供をお雪の言うとおりに、大切に育てました。そして、②Φ<sub>i</sub>お雪とまた会える日を夢に見続けたのです。  
 (①箕吉<sub>i</sub>按照阿雪说的将她留下的孩子们细心地带大。并且，②Φ<sub>i</sub>一直梦想有一天能和阿雪重逢。)

例(32)では、文②の主語は文①の主題主語「おじいさんは」と、例(33)では、文②の主語は

文①の主題主語「みのきちは」と同一指示となり、それぞれ省略されている。また、二例では中国語訳でも同じ省略が起こっている。このような省略について、久野(1978:103)は、「反復主題省略」として議論を行い、その条件は「第一文と第二文の主題が同一である場合は、第二文の主題を省略できる」とであると指摘している。

日本語テキストでは主語省略が発生しているが、中国語訳では起こっていない例を見てみよう。

- (34) ①昔、山に一人で暮らす**若者<sub>i</sub>**がいました。②**Φ<sub>i</sub>**働き者でしたが、暮らしは貧しいものでした。

(很久以前, 有个独自在山里生活的**年轻人<sub>i</sub>**。年轻人<sub>i</sub>很勤快, 可是生活却很贫穷。)

- (35) ①昔、ある海辺の村に「**浦島太郎**」という**若者<sub>i</sub>**がいました。②**Φ<sub>i</sub>**毎日、舟をこぎ、海辺では魚を捕って暮らしました。

(很久以前, 在一个海边的村子里, 有一个叫“**浦岛太郎**”的**年轻人<sub>i</sub>**。每天, 他<sub>i</sub>都划着船在海边以捕鱼为生。)

例(34)と(35)では、いずれも文①で提示された存在主体がテキストの主題となり、そのすぐ次の文②で省略されているが、中国語訳では省略されていない。このような省略について、久野(1978:110)は「異主題省略」として議論を行い、その条件は「「Yハ……X……。Xハ……」という二つの主題文の連続がある場合、「Xハ」が省略できるのは、話者の視点がYのそれと完全に一致し(即ちE(Y)=1)、第二文もYの視点からの記述である場合に限られる」とであると論じている。一方、中国語訳で省略が観察できなかったことについては、中国語では視点制約より厳しい文構成上の制約が課されることが考えられる。

日本語テキストでは省略されていないが、中国語訳では省略されている例も見られた。

- (36) ①ある日、願いがかなって、**赤ちゃん<sub>i</sub>**が生まれました。②**それ<sub>i</sub>**は大人の親指ほどの小さな小さな男の子でした。

(有一天, 他们的愿望实现了, 一个**婴儿<sub>i</sub>**出生了。Φ<sub>i</sub>是个成人大拇指一样大小的小小小小的男孩儿)

例(35)と同じように、例(36)では、「それ」は文①の補語「赤ちゃん」と同一指示となっているが、主観的な述べ方において、例(35)と異なる視点の寄り方となっている。日本語では「それ」で「赤ちゃん」を客体化し、願いの実現に対する述べ手の驚き気持ちが伝わるが、中国語では省略の形でそれを客体化し、同じような感情が伝わっていると考えられる。

また、両言語とも非省略の例を1例観察できた。

- (37) 歩き回るうち、ある大きな御殿<sub>i</sub>の前に出ました。それ<sub>i</sub>は大臣のお屋敷でした。  
(四处徘徊时，他来到一个大大的宫殿<sub>i</sub>前。那<sub>i</sub>是大臣的宅邸)

例(37)は客観的な述べ方において、例(35)と例(36)と異なっているように考えられる。客観的に物語を展開する立場であるので、日本語では「それ」で、中国語では「那」で客体化を行っている。

### 3.3.2 「仲介のつながり」の場合

調査では、次の(38)のような一見仲介のつながりと見える省略例が観察された。

- (38) ①昔、ある海辺の村に「浦島太郎」という若者<sub>i</sub>がいました。② $\Phi_i$  毎日、舟をこぎ、海辺では魚を捕って暮らしました。  
③ $\Phi_i$  ある日、いつものように海へ出ましたが、さっぱりつれません。  
④ $\Phi_i$  あきらめてその日は早く浜に帰ってくると、村の子供がわいわい騒いでいました。  
⑤ $\Phi_i$  近づいてみると、子がめがぐったりとしていました。  
(①很久以前，在一个海边的村子里，有一个叫“浦岛太郎”的年轻人<sub>i</sub>。②每天，他<sub>i</sub>都划着船在海边以捕鱼为生。  
③一天，他<sub>i</sub>像往常一样出海打鱼，可是根本钓不到鱼。  
④于是他<sub>i</sub>放弃了，那天提早回到海边，看到村里的孩子们在那里闹哄哄的。  
⑤浦岛太郎<sub>i</sub>走近一看，一只小乌龟筋疲力尽地躺在那里。)

例(38)では、日本語では②、③、④、⑤の主語はいずれも①における「「浦島太郎」という若者」と同一指示となり、省略されているが、中国語訳ではいずれも明示されている。主語省略のある文の間に介入要素がないという点では仲介のつながりと考えられるが、文章のなり立てからみて、それぞれの文は一つ一つの段落として区切りを立てているということが興味深い。作者の書き方によるものであるかもしれないが、本稿では、段落がつけられている点からみて、仲介のつながりには該当しなくて、遠隔のつながりとして扱うことにする。これは遠隔のつながりの省略例が仲介のつながりの省略例より多数である理由であると考えられる。

- (39) ①一休さん<sub>i</sub>は修業を重ね、立派なお坊さんになりました。②しかし、 $\Phi_i$  決して威張ったりしませんでした。③ $\Phi_i$  えらい人とも。まずい人とも同じようにふれあい、



とんちを使って、世の中に尽くしたのです。

(①一休<sub>i</sub> 历经修行，成了一位了不起的僧人。②但是，他<sub>i</sub> 绝不摆架子。③不管是大人物，还是贫穷的人，一休<sub>i</sub> 都一视同仁，用他的机智，为世间造福。)

例(39)では、日本語では②、③、④の主語はいずれも①の主題主語「一休さん」と同一指示となり、省略されているが、中国語訳ではいずれも明示されている。この現象によって、日本語における主題の及ぼす範囲がかなり広いことが検証できるが、数の少ないことは、童話テキストの制限であるように考えられる。

### 3.3.3 「遠隔のつながり」の場合

本稿の調査では遠隔のつながりの主語省略は12例観察した。児童を対象として創作されるテキスト形式であるため、遠隔のつながりによる省略が避けられるはずであると考えられるが、なぜ12例もの遠隔省略が観察されたのだろうか。実は、本稿の観察では、ほとんどは(38)のような段落を超えての省略や、次の例(40)と例(41)の中の文④のような省略となっている。まずは(40)のような省略を見てみよう。

(40) Φ<sub>i</sub> 昔々の寒い北国のお話です。

(这<sub>i</sub> 是一个很久很久以前寒冷的北国的故事)

日本語では省略がごく自然であるが、中国語では主語がないと、物語の始まりとしては不適切である。しかし、次の例(41)の中の文③のように、中国語訳の主語のない文が物語の展開背景として自然であるように考えられる。

(41) ①昔、山に一人で暮らす**若者<sub>i</sub>**がいました。②Φ<sub>i</sub>働き者でしたが、暮らしは貧しいものでした。③寒さも厳しくなり始めたある日のことです。④Φ<sub>i</sub>集めた薪を背負い、家路を歩いていると、どこからか物音が聞こえてきました。⑤**不思議に思った若者<sub>i</sub>**がそちらのほうへ行ってみると、わなにかかってもがいている美しい鶴がいました。⑥**若者<sub>i</sub>**は鶴をかわいそうに思い、わなを外してあげました。

(①很久以前，有个独自在山里生活的**年轻人<sub>i</sub>**。②**年轻人<sub>i</sub>**很勤快，可是生活却很贫穷。③天气越来越冷了，有一天，④**年轻人<sub>i</sub>**背着捡来的柴，走在回家的路上，不知从哪里传来了响声。⑤**年轻人<sub>i</sub>**觉得很奇怪就朝着那个方向走过去一看，是一只掉进陷阱中挣扎的美丽的仙鹤。⑥**年轻人<sub>i</sub>**看到仙鹤很可怜，于是帮它解开了绳子)

例(41)では、文②と文④の主語が文①の「若者」と同一指示で省略されている。ただし、

文②は直接のつながりによる省略として扱うが、文④は文①と文②、文③を隔て生じた省略であるため、本節で検討する遠隔のつながりによる省略として扱う。文③を隔てているが、文③は物語の時候背景になることに気を付けてほしい。つまり文を隔てているが、児童の理解に影響する介入要素がないので、省略が自然であるように考えられる。しかし、中国語訳では、省略が生じていないことによって、日本語における主題の影響力はさらに検証されているように考えられる。

一方、文⑤と文⑥では主語が明示されていることについて、次のように解釈できる。文⑤では主語は「不思議に思った」によって限定され、その上格助詞「が」をつけることによって客観的視点を読み取られる。また、文⑤で「鶴」が介入要素として現れたため、文⑥で主述関係を明示するのが理解しやすいと考えられる。つまり、童話テキストにおける遠隔のつながりに見られる主語省略と非省略は児童の理解力に基づくものであることがわかった。

#### 4. 結論

以上、本稿では、中日両言語における主語省略のテキスト構成的及び語用的特徴を明確するため、童話の日中対訳のテキストを対象に、主語省略の有無、前提要素、前提要素との距離、語用上の制限などの使用実態を考察した。結果としては、両言語のテキストにおいては、結束的な主語省略に比べ、現場指示的な主語省略がより多数であるが、日本語のテキストにおける主語省略はより顕著に見られることがわかる。これは童話テキストが児童の認知特徴と理解力に基づいて作り出されるもので、テキスト内の省略は避けられると考えられるが、日本語のテキスト、特に会話でよく見られる現場指示的な主語省略によって「自己の視点」で物事を把握する日本語の性格が具現されている。一方、非省略は主体の強調や登場人物の人物像の浮き彫り、発話態度の伝達などの語用的伝達効果が見られる。また、テキスト内の主語省略と非省略は、視点の転換や他要素の介在による選択であるように考えられる。

#### 〈注〉

- 1) 執筆者は中国南通大学に勤務し、本稿は中国南通大学「人才引进プログラム：日本語における主語省略についての研究(03081044)」、「人文社会科学研究一般項目：日本童话故事中的省略现象研究(13042016)」、「横向研究項目：日语叙事语篇与省略模式研究(03070627)」のもとで行われた研究成果の一部である。
- 2) 「主語」と近接した概念に「主格」と「主題」とがあり、三者は構文レベルを異にする概念である。「主語」は、統語構造上文の表している事態(文の叙述内容である出来事や事柄)が、それを核

として形成されている、といった事態の中心をなしている構成要素であり、他の語との結合や配列を表すものの一種である。それに対して、「主格」は普通主格助詞「ガ」によって提示され、形態上体言と用言の意味的關係を類型化したものの一種であり、「主題」はディスコース上の分類で、係助詞「ハ」によって提示され、何について話すか、という主題又は題目と、その主題について何を言うかによる情報構造を示すものである。ただ、構文上の主語が、形態上の主格やディスコース上の主題にあたることは多く、主格や主題が、プロトタイプとしての主語の一要素になることが多いのも事実である。本稿では、主語の省略条件を明らかにすることにしているが、主格或いは主題についての先行研究にも踏まえて研究を進めていきたいと考えている。(仁田(1997)、仁科(2008)を参照)

- 3) *i* は同一性(identity)を表す。ある二つの要素の右下に *i* をつけることによって、その二つの要素が同一指示的であることを表す。二組の同一指示關係が認められる場合、*i* と *j* を使いわけてそれぞれの同一指示關係を記す。ただし、先行話題と同一指示關係になる場合には、両要素の右下に *T* をつける。話し手/聞き手を指し示す場合には、話し手か聞き手かによって、右下に *S* か *H* をつけることにする。
- 4) 本稿で観察する複文とテキストにおける非省略の例はいずれも文や文脈に前提要素がある主語の非省略の例、つまり、結束機能を果たす主語の例である。
- 5) 久野(1978 : 134)によると、「文中の名詞句の *x* 指示対象に対する話し手の自己同一視化を共感(Empathy)と呼び、その度合い、即ち共感度を  $E(x)$  で表す。値 0(客観描写)から値 1(完全な同一視化)までの連続体である」とされる。久野(1978)は一般原理として、視点についていくつかの制約を提唱した。まずは、視点の一貫性というものである。視点の一貫性とは「単一の文は、共感度關係に論理的矛盾を含んでいてはいけない」(久野(1978 : 136))ということである。

## 例文出典

李娜・高宏編訳(2009)『日本经典童话诵读：日汉对照』大连理工大学出版社。

## 参考文献

- 大倉孔一(1970) 「幼児における接続助詞「て」の用法及びその実態に基づく幼児に対する言語指導のあり方」『Japanese Educational Research Association』第29巻, p.130.
- 久野 暉(1978)『談話の文法』大修館書店。
- 砂川有里子(1990)「主題の省略と非省略」『文藝言語研究・言語篇』18, 筑波大学, 15-34.
- 寺村秀夫(1982)『日本語のシンタクスと意味』くろしお出版。
- 仁科洋江(2008)「初級文法の記述を考えるー主語・主体・主格・主題ー」日本語教育連絡会議論文集,

pp.12-18.

仁田義雄(1997)『日本語文法研究序説』くろしお出版.

——(1999)『日本語のモダリティと人称2版(増補)』ひつじ書房.

野田尚史(2004)「見えない主語を捉える」『言語』33-2, 大修館書店, 24-31.

ハリデー, M. A. K. ・ R. ハッサン著、安藤貞雄他訳(1997)『テキストはどのように構成されるか』ひつじ書房.

付改革(2012a)「日本語の複文における主語省略の条件について — 省略要素の同定を中心に — 」『言語の普遍性と個別性』第3号, 新潟大学現代社会文化研究科, pp.99-125.

——(2012b)「複文の従属節における主語省略について — 「カラ」節を中心に — 」『現代社会文化研究』第52号, 新潟大学現代社会文化研究科, pp.265-282.

——(2018)「複文の従属節における主語省略について — 「ノデ」節を中心に — 」『言語の普遍性と個別性』第9号, 新潟大学現代社会文化研究科, pp.11-24

益岡隆志(1997)「表現の主観性」(田窪行則(1997)『視点と言語行動』(pp.1-11)所収).

三上 章(1969)『象は鼻が長い』くろしお出版.

森田良行(2002)『日本語文法の発想』ひつじ書房.